

ことばの構造とことばの論理¹

本日は何かと御多忙の折から、私共のために御越し下さいましたことに対して、厚く御礼申し上げます。1964年に私が京大に着任致しましてから34年、1953年、新入生として初めて京都大学の門をくぐりましたときから数えますと実に45年、殆ど半世紀に亘ってこの大学のお陰を被って参りました。本日最終講義をさせて戴くに当たり、聊かの感慨を禁じ得ません。これまでいろいろと迷惑を掛けながら支えて下さった多くの方々に改めて御礼を申し上げたいと思います。

さて、本日は余り専門に立ち入ったことをお話しするというよりは、いくらかとりとめのないことを、申し上げることでその責を塞ぐことをお許し戴きたいと存じます。

私が大学で専攻いたしましたのは、言語学でありましたが、その時の恩師は泉井久之助先生でありました。先生は特にヴィルヘルム・フォン・フンボルト Wilhelm von Humboldt (1767-1835) の流れを汲む学者でありまして、先生に師事するようになってから、不肖の弟子ではありましたが、その縁につながるものが、私の考え方の基礎を作って参ったように思います。縁と申しますか、出会いというものは実に不思議なものであって、時に一生を決定するようなことになるという実感は、年を経る毎に深くなって参ります。

振り返ってみますと、それは必ずしも出会いの時間が永かったか短かったかということだけには限らないように思います。泉井先生の許におりましたのは丸9年でありまして、勿論先生の影響は大きかったのでありますが、4回生の冬、文学部の集中講義にお越しになったのは、当時慶應義塾大学に居られました、井筒俊彦先生でありました。講義題目は「一般意味論」という当時の私には余り聞き慣れないものでありましたが、この僅か1週間の講義によって、私は殆ど圧倒的で、大袈裟に申しますと眼くるめくような印象を受けることになりました。一般意味論と申しますのは、ウエルビー Lady Welby (不詳) という女性が先駆をし、それがコージブスキー Alfred Habdank Skarbek Korzybski (1879-1950) などを経て早川 Samuel Ichiyé Hayakawa (1906-1992) に至る流れをなすものでありまして、どちらかといえばアカデミックな学問というよりは、むしろ市井の運動のような形をとっていたということでありました。この派の人々はことばというものが屢々現実を正確に表すものではないために、それが人々に影響を与え、さまざまな歪みを生み出すのであって、正確に事態を表すことばを用いることが、必要だという主張を持っていたようであります。

しかしこの講義題目は、いわば枕に過ぎませんで、当時流行しておりましたサルトルを

¹これは京都大学停年退官講義として平成10年3月19日、京都大学大学院人間・環境学研究科棟地下会議室において行ったものである。

はじめとして、さまざまな思想家について説き来たり説き去るといふふうでございました。当時そのすべてを理解できなかったのは当然でありましたが、その根底にはフンボルト・サピア・ウオーフ²の仮説といわれているものがあつたことは確かであると思ひます。

この仮説というのは、言語によって現実をどう切り出すかは、それぞれの言語によって異なつてゐるという考へであります。たとえばよくその例証として持ち出されますものに、スペクトルがあります。スペクトルは明らかに連続して移つていく色からなつていて、そこに「自然な」境界があるわけではありません。しかしことばはその中からあるいは「赤」、「青」、「黄色」などという色を切り出して参ります。しかもその切り出し方は民族によってそれぞれに異なつておられます。例えば「緑」という色をとつてみましても、この語が、現在のよな色を指すに至つたのは、比較的新しいのではないか³、といわれておられます。日本語は特に系統の同じ言語を持ちませんので、理論的には比較方法を適用することができず、従つて語源研究にも、さまざまな推測が混じつて参ります。しかし「山は青い」というときに、山がいわゆるブルーの色をしていたかといへば、必ずしもそうではないと思われまふ。我々のいう緑の色をも指していたと思われまふのであります⁴。いまでも「草木が青々と茂つてゐる」と言うときに、私たちががイメージするのは緑の色であります。

これは恩師であられた新村出先生の提唱された説であると聞いておられますが、「緑」というのは「水」midu の延語であつて、本来「みづみづしい」の意味ではなかつたかと、泉井先生から聞かされたことがあります。確かに「緑なす黒髪」という表現は、現在の感覚で申しますと単なる形容矛盾に過ぎませんし、また「嬰兒」とうのはどう最眞目に見ても赤い色をしておられます。これがもし「みずみづしい黒髪」、「みずみづしい子ども」という

²Edward Sapir (1884–1939) は人類学者ボアス Franz Boas (1858–1942) の弟子で、ウオーフ Benjamin Lee Whorf (1897–1941) の師であつた。この仮説を最もはっきりした形で提示したのはウオーフであつた。

³『日本国語大辞典』(小学館 昭和51年4月)によれば、「草木の葉のよな色」とあり、万葉集10-2177の「春は萌え夏は緑に紅の縹色(まだら)に見ゆる秋の山かも」が引用されている。これは明らかに現代語と同じ「緑」を指していると思われまふ。しかしこれが指す色が現在の「みどり」に固定していたかどうか、何時固定したのかは筆者には現在のところ判らない。

⁴『日本国語大辞典』(小学館)には、「本来は黒と白との中間の範囲を示す広い色名で、主に青、緑、藍をさし、時には、黒、白をもさした」とある。スラヴ諸語で今日「青」に当たる語は синий と同根の語が一般的であるが、語源については諸説があつて定まらない。リトアニア語の šėmas, stildee および梵語の śyāās がこれに対応するとすれば、前者は「灰色の」であり、後者は black, dark grey, green, or blue, sable, dusky, swarthy とある。sable というのはクロテンの毛皮の色をいうらしく、dusky は「浅黒い」、swarthy は頭などについて「黒ずんだ」の意味であるという。してみればこの場合にも、非常に広い色彩を指していたということにならう。ラテン語の場合、アントワヌ・メイエによれば、色彩語には本来語が少ないということであるが、黒に対応するのは albus ではなくて candidus である。これは「燃える、炎をあげて燃える」を意味する語根から派生し、「まぶしいように白い」、「輝くように白い」の意味をもつていて、「青ざめた白」を表す albus とは異なつてゐるようである。candidus はまた、white of light color (in contrast with darker varieties, parts etc.) をも意味し、更には (of unripe fruit, etc.) pale green, green の意味も持つという。これに対し albus は light skinned, fair, silver, white with age, grey 等を意味するという。これはまた「緑」のオリブ特にその未熟なものを表すという。そうして見れば candidus も niger と対極にあるものというよりは、もっと幅を持つていて、明るさを持つ色を、albus は「淡さ」を持つものを表していたといひうるのかも知れない。スラヴ語で「白い」を表す бѣлыи も梵語の bhāti 「輝く」と近縁であり、ギリシャ語の λευχός も「輝く」の意味から生じたと考えられてゐる。

ことになれば、理解することは比較的容易になるでありません⁵。

私たちが言語の存在しないような状況を想像することは、殆ど無理ではありますが、もしあえて妄想を逞しくしたならば、どういうことが言えるでありませんか。空を飛ぶ雲は一つ一つ形も色も、また流れる速度も異なっております。我々が一概に草といっているものも、色も違い形も違い、またそのそよぐ様子も、一つ一つ異なっているに違いありません。そう考えるならば、現象の世界は色も形も、変幻きわまりないものであるということができようかと思えます。カオス、即ち混沌に他ならないでありません。しかしひとたびそこに名が付けられるならば、その混沌の中から、「雲」が、あるいは「草」が同じものの異なりとして立ち現れてくると想像されます。さらに私たちの類に、あるいは強く、あるいは弱く感じられる感觸と、雲の流れ、草のそよぎなどをみて、ひっくりめて「風」と名を付けるとどうでありませんか。感覚の受容器にばらばらのものが、一つに凝集してくるに違いありません。異なったものの中に一定の関係が認められ、そこに秩序が生まれてくると考えられるのであります。現象世界の混沌の中から事物が、いわば救い出されてくるのであります。古代のギリシャ人はいみじくも秩序をあらわすのに、「ことば」意味するロゴスを用いました。

これは非常に強い意味での、フンボルト・サピア・ウオーフの仮説の解釈でありまして、これについては、いろいろな問題もありますけれども、その基本的な考え方においてはこれは決して誤っているようには、思われないのであります。

外界のある種の現象に対して、一旦このように名が与えられますと、私どもはその名で指されるものが現実である、あるいは現実に存在する、と考える傾向を本能的にもっているように思えます。この点に関しまして、先に申しました井筒先生が、講義の中で次のような例を引かれたことが、非常に強い印象をもって、私の脳裏に残っております。それは、日本語で「太郎は花子を愛している」とか、英語で Jack loves Jill. とかいうときに、我々は「愛している」というのは他動詞であると信じて疑わない。しかし本当にそうであろうか。太郎が花子を愛していると感じるのは光線が花子に当たり、それが太郎の網膜に映じて、その姿態に太郎の心が悩ましい感じになる、というのが実体ではなからうか。もしもそうであるならば、太郎が行為者なのではなく、実は彼は被害者そのものなのである、という意味のものであります。

私はそれまでそういうことは考えてもみたことがありませんでしたので、本当にびっくり致しましたが、確かにそう考えれば「愛する」というのは、一項述語、即ち自動詞だということになり、太郎が悩乱するのはいわば太郎の勝手でありまして、花子までそれにつれて悩乱する義理はないということになって参ります。そうとすれば、これによって初めて、「片思い」なるものが存在する、理論的な基礎が得られることになる、とまあこういう風に合点がいったわけであります。

⁵この語については「水」と関係づけるものの外に、「芽」と関係づけるものもあるようである。

何をたわけたことをと思われるかも知れませんが、私が早くから言語と認識の問題に関心を寄せることになったのには、実はこのようなきっかけがございました。そこでつくづく「恋い」という字を眺めてみますと、確かになにやら変な気がして参ります。そこで早速に「恋」と「変」という字を辞書によって調べてみますと、これらの字の冠の部分は「乱れる」という意味であると書いてあります。「恋」ということばは「心が乱れる」、いいかえれば「心が変になる」という意味であったということが判りました。「変」の方の下の文字は「ぼくによ」とよばれ、ものを打ち割ること、また物事をさせる意味に用いられるとあります。正しいかどうかは専門家であります阿辻先生のような方に何より外にはありませんが、どうも「変にする」「変える」の意味であるということになるのではないかと思います。もしそうとすれば、流石に中国の文化というものは大したものであって、既に何千年か前から、中国人は恋なるものの本質に既に迫っていたということになりましょう。

そういう眼でことばというものを改めて観察してみますと、合点の行かないことがたくさんあることに気付いて参ります。たとえば「犬が歩く」という事態を考えてみると致します。再びことばのない状態を妄想してみますと、犬なる対象があり、それが後に「足」と呼ばれることになる四本の突起を交互に動かして私の前をよぎって行くという場面が、まず想像されます。私はそれが私の左手にあっても「犬」であることには変わりはありませんし、それが移動して右手にいてもやはり「犬」であります。それを「歩く」というには空間の移動が関係していることは確かでありますけれども、それだけではなさそうであります。足と呼ばれることになる突起が一定の規則性を持って動くことが必要だと思われるからであります。

しかしそれだけでよいのかといえ、それでは「走る」ということと区別が付かないこととなります。「走る」と「歩く」という違いは移動の速度にあるのかといえ、必ずしもそうとも言えない事態が考えられます。人が「走る」というのは、一方の足が地面に着く前に他方の足が拳がっている必要があると思われれます。しかしこの条件は、明らかに行為そのものとは異なっているはずであります。しかしまた、これらの条件がすべてそろっていたと仮に致しましても、それが直ちに「歩く」、あるいは「走る」という「行為」として認識されるのかといえ、どうもそこには論理的な飛躍があるように感じられます。このようなことをいろいろ考えているうちに、基本となるのはある対象の上に生じる状態の変化を、比喩的な意味ではありますが時間によって微分したものとして、それとは関係のない付加的な条件をも加味してパターンをつくるのではないか、という仮説を立ててみることにしました。

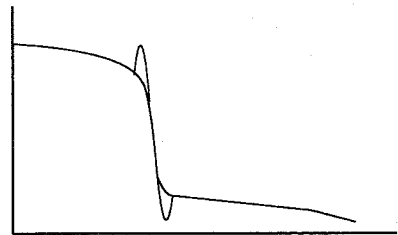
この仮説をいろいろな場合に当てはめてみますと、割にうまく働くことが判って参りました。動詞の意味が時間と密接な関係を持つこともよく説明できるように思われて参ります。

今、ある人物が斧を手にしてこれを動かしているという状況を考えてみますと、斧が空

を切っているときには、「斧を振っている」と認識されるでしょうし、もし例えば木に当たっているとすれば、「斧で木をたたいている」ことになりましょう。もし木の上に状態の変化が生じ、木が二つの部分に分かれましたならば、人は「斧で木を切る」と認識することになると思われます。しかしその場合でも、主体の状態の変化そのものについては、これら三つの「行為」の間には何らの相違もないように思われます。このことから、他動詞の場合には主たる主体の状態の変化の外に、他の対象の状態の変化も取り込む形で意味が生成されると考える必要があると思われるのであります。

しかしもしそうだといたしますと、「打つ」、「振る」、「切る」などのことばが存在するからといって、これらの行為が異なるものとして客観的にも存在しているかどうかは、甚だ疑わしいものになって参ります。再びもしそうだと致しますと、先の「愛」とか「恋」はどうなるのでしょうか。よく考えてみると、外にもこれによく似たものが数多くあります。例えば「橋を渡る」、「目標を通り過ぎる」という場合の「渡る」、「通り過ぎる」がそうであります。この行為の実体は「歩く」ことと本質的に変わるところがありません。ただある対象と歩く主体との相対的位置が逆転することと、その対象の上または中を歩くか、それともこれとは接触することなく歩くかという、行為とは無関係な条件が付加されているに過ぎないと考えられます。それにもかかわらず、相対的な位置の逆転という関係が成立するためには、ある着目する対象の存在が絶対に必要であります。これがこれらの動詞が目的格をとる、本当の理由でありまして、これらの動詞が「行為を他に及ぼす」ものであり得ないことは、すでにして明らかであります。ことばにある行為が客観的にも存在するというのが単なる思いこみに過ぎないと申しますのは、偏にこのような考えに基づいているのであります。

ところで先にフンボルト・サピア・ウオーフの仮説が、強力に過ぎるということを申しましたが、そういう風に考えるに至りました根拠としては、例えば次のようなことがあります。これは渡辺慧という方が岩波新書に書かれたものの孫引きであります、マッハ帯というものであります。エルンスト・マッハ Ernst Mach (1834-1916) は元来物理学者でありまして、音速のマッハという単位は、彼の名から来ているということですが、彼は「光りの強度が図のように分布しているとき、人は実線のような光りの強さを感じる上に、点線で書いたようなよけいなものを見る」ということを発見し、数学的に



$$K = I - c \frac{\partial^2 I}{\partial x^2}$$

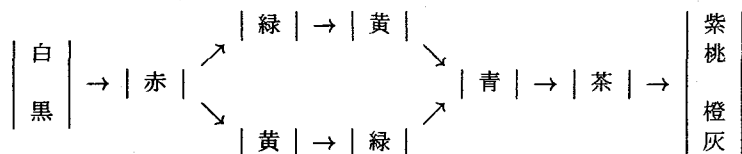
という式で表されることを示したということでありませ⁶。ここで I というのは物理的な強

⁶ 渡辺慧『認識とパタン』岩波新書(36) 1980年。

度、 K というのは人間の感じる強度であります。二次の微係数は x の関数が上に凸であるときには負の値をとり、凹であるときには正の値をとりますから、点線のようなものが現れることとなります。我どもが物体を見るとき、実際には存在しないはずの輪郭が見えるというのは、このような感覚器のメカニズムにあるということが出来ます。実際には物体は三次元でありますから、 y 方向のものも必要であると思われれます。渡辺氏の示されたのは説明を容易にするためのものでありまして、実際には接面の勾配の変化を考えることになるのであらうと思われれます。そうでなければわざわざ偏微分を用いることはないと思われれるからであります。

マッハの発見は1865年であったそうですが、1950年になると本質的にはこれと同じ原理を持った現象を網膜において発見し、横抑制 lateral inhibition と名付けたといわれます⁷。更に同じことは蝸牛殻においても存在することが分かって参ったということでもあります⁸。

先ほど申したスペクトルの場合でも、事情は同じようであります。バーリンとケイという学者が言語による色彩に関する語を研究しているうちに、言語によって色彩の認知の仕方に階層関係があることを発見いたしました⁹。ホーレンシュタインによれば、それはおよそ次のようなものであります。



バーリンとケイによりますと、基本的な色彩語の数は11でありまして、私どもの世界のすべての言語は、この中から、特定の基本色彩語を選び出しているというのであります。一方、あらゆる言語は白と黒に対する名前は持っているといひます。仮に三つの色彩語を持つ言語があると致しますと、第三の語は赤を指すものであり、もし四つの語を持つとすれば、それは黄色かもしくは緑を持つ、というのであります。このようにして色彩の認識には一定の順序が存在することが主張されました。

このことの意味するものは極めて重大であると言わねばなりません。ホーレンシュタインはこれに関して、

「……不確定性論者の信条を要約すれば、世界は任意に切断されうる連続体として経験され、その諸断片も任意に結合され性質の任意の配置によって固定される、ということになる。恣意的な切断可能性の絶好の事例と目されたのは色のスペクトルであったが、そ

⁷ハートライン Haldan Keffer Hartline (1903-?). アメリカの物理学者。Sensory Inhibition (1967) という著書がある。

⁸Georg von Békésy (1899-1972). アメリカの物理学者。

⁹Brent Berlin & Paul Key, Basic Color Terms, Berkeley, University of California Press, 1969.

れも納得のいく話である。スペクトル上の色は、連続的に次の色に移っていく。色相互の間には、切断に手がかりを与えてくれるような不連続な切れ目はどこにも見あたらない。色のスペクトルがもつこの連続的な性質は、物理学によっても確かめられる。色スペクトルを支える光の波自体も連続体をなしているのである。したがって、言語ごとに、文化ごとに、また実際の要求ごとに異なった切断があると想定することほど当然なことはいないし、クワインのように、このいわゆる任意的切断の事例を証拠に、少なくとも経験のある一定領域では自然的クラスは存在しない、と主張するのも無理からぬ話なのである」と述べております¹⁰。

ホーレンシュタインがここから導き出した結論もまた、私がこれまで見て参りましたことと符合いたしております。彼はこれを次のように要約いたしておるのであります。

「1. ある限定された現象領域に対するカテゴリーの不定のクラスのなかから、詳細に規定されうる基準に従って、(a) 有限で、(b) 階層化された、自然的な一次カテゴリーないし基本カテゴリー（例えば基本色彩語）の部分クラスを取り出すことができる。2. 自然的カテゴリーに属する現象では、そのカテゴリーによって指示されるものそれぞれが互いに等価なわけではない。つまり、一つのカテゴリーによって指示されるものは、そのカテゴリーに最適である場合も、それほどではない場合も、またかなり疑わしい場合もある。これらのカテゴリーの外延は、そのカテゴリーにあまりふさわしくない指示対象の周辺では変動するが（しかも、一言語内でも他言語間でも同程度に）、明らかにそこには、例えばその基本色彩語がもはや適用されえない絶対的限界というものが存在する。したがって逆に言えば、ほぼ普遍的と言ってさしつかえのない恒常的なものが、そのカテゴリーの最適の指示対象、いわゆる焦点的指示対象、つまり原型とみなされているのである。具体的に言うと、同じか、もしくは異なった言語集団の成員に赤を表す語の適用範囲について問うなら、一定しない境界がその答である。しかし、この語が表す最も典型的な色はどれかと問えば、圧倒的に多数の人が、色スペクトルの同じ断片を指し示すはずである (*ibid.*)」

すなわちここでもまた、言語による自然の切り方が、全く言語の恣意に任されているとは言えないという結果に到達するのであります。

ともあれ、こういうような、余り役には立ちそうもないことをあれこれ考えておりますうちに、また少なくとも私にとって衝撃的な出会いを、比較的最近、ソヴェトの崩壊の少し前に経験することになりました。たまたまクリモフ Георгий Андреевич Климов (1928-1997) という学者の一連の書物を読む機会をえたのであります。この時、かつて学生の頃感じたような、衝撃的な思いを再び感じたのであります。

ともすれば私たちはソヴェト・ロシアには社会主義のイデオロギーが貫徹しているかのように思いがちであります。実はフンボルトをはじめとするさまざまな思想、それを受け継いだ帝政ロシア期の、例えばポチェブニャー Александр Афанасьевич Потебня

¹⁰ Elmar Holenstein, *Von der Hintergebarkeit der Sprache*, Frankfurt am Main, 1980, pp.72-74. エルマー・ホーレンシュタイン『認知と言語、現象学的探求』産業図書 1986年。

(1835-1891) のような大学者の伝統は絶えることなく、地下水脈のように脈々と息づいておりました。この伝統の中で、幾多の俊秀が育ってきていたのであります。一方帝政ロシア期から連綿として続いていたものに、コーカサス諸語の研究がありました。そしてこれらの言語が非常に変わった構造を持っていることも知られておりました、これを巡って古くからさまざまな議論がなされてきておりました。

どういふ点が変わっているとして問題にされたかと申しますと、まずこれらの言語には受動態がない、ということがあります。少し刺激的な例ではありますが、わかりやすさのためにあえて申しますと、例えば「太郎が死ぬ」という表現は、日本語でいいますと「太郎死ぬ」のように表現されます。テニヲハを抜きましたように、この場合「太郎」には格関係を表すものが何も付いておりません。これを「絶対格」と申しますが、これに対して「次郎+太郎死ぬ」といえば次郎が太郎を殺すことになって参ります。このとき今仮に「次郎+」のように書きました「+」というのはいわゆる能格といわれる格表示であります。この二つを考え合わせて、これらの言語に受動態がないのはこの「+」は「次郎によって」の意味であり、「太郎が次郎によって死ぬ」と解釈されるためであって、この場合の「死ぬ」というのは実は「殺される」という受動態なのだ、という、いわゆる他動詞受動説が唱えられました。自動詞は能動態で用いられるが、他動詞は常に受動態で用いられるというのであります。これは論理的には一見如何にも肯綮に当たっているかにも見えますけれども、元來受動態と申しますものは能動態と対になって初めて意味をもち得ると考えられますから、この説にもやはり無理なところがあるといわねばなりません。

時間の関係もありまして研究史の細部に立ち入ることも、実例を挙げることも叶いませんが、このような考えに立ち至りましたのは、一つには同じ絶対格を持つ「太郎」が主語になったり、目的語になったりすることが当時とうてい考えられないと思われたからであります。またもう一つには自動詞と他動詞とは完全に異なった範疇であり、同じ動詞が自動詞にも他動詞にも用いられることが常識としてあり得ないと思われてきたからでもあります。これが「+」という形態素を「によって」と解釈する理由にもなったかと思われま

す。しかし研究が進んで参りますと、従来この種の言語の変種と考えられてきたものの中に、動詞の意味に関して異なるものがあることが分かって参りました。たとえばアメリカのインディアンの言語、南米の言語、パプア・ニューギニアの言語、アフリカのアボリジンの言語などがそうだといわれております。これらの言語においては、他動詞的なものと自動詞的なものがある程度類として分離していたかに見えましたコーカサス諸語の場合とは異なりまして、生き物に関係するか、無生物に関係するかによって動詞の分類が変わる、具体的には接辞が異なる、ということが分かって参りました。

すなわち、これらの言語では他動詞か自動詞かは重大なことではなくてその区別すらないものが多く、生物に関わるものかそうでないかということの方が、これらのことばを話す人々にとって、遥かに重大であるということが分かって参ったわけであります。また名詞の性も当然ながら生き物であるものと無生物とが対立する形を持ち、能格に当たる「+」

の接辞を持ちうるのは生物性のみであることも分かって参りました。これらの言語 — これを一応活格言語と名付けておきますと — に見られる諸現象を見ているうちに、理由はいろいろありますけれども、実はこれは能格言語の以前の姿を持っているものであると考えない訳にはいかなくなって参りました。

その結果、この種の言語におきましては、絶対格に立つ名詞は動詞と最も密接に結びついているものでありまして、絶対格と動詞の結びつきによって表される事態に「+」の指標をもつ能格あるいは活格に立つ名詞がつかますと、この名詞の表すものによってその事態が将来されるということになるという、論理構造を持っていることが、明らかになった来たわけであります。

これを先ほど動詞について申しました議論に引き付けてみますと、たとえば「次郎が太郎を殺す」という事態も、「太郎が死ぬ」という事態も、太郎の上に死という過程が生じる点では同じであります。もしもそうでなければ次郎が太郎を殺すことはできないことになりましょう。逆に太郎は次郎がいなくても死ぬことはできます。しかも「次郎が太郎を殺す」という事態における次郎の存在は単なる認定の問題に過ぎないとも考えられます。これらの言語においては動詞は絶対格、即ち意味上の自動詞の主語あるいは意味上の他動詞の目的語とまず文法的一致を行うことが知られておりますが、これなども、今申しましたことから、当然と考えられます。

例えばもし呪いが有効であると信じられている社会におきましては、たとえ遠く離れておりましても、なお次郎を太郎の死の原因であると認定することは、十分に可能なのであります。この文化においてはアリバイは成立しないといえましょう。このように考えればこれらの言語は、動詞の変化の中にア・プリオリに主語を組み込むヨーロッパの言語よりも、遙かに現実に近い表現を持っているということができると思うのであります。

事態を分かり易くするために用いられている方法を用いて、今いった事柄を整理いたしますと、次のようになるかと思えます。すなわち、いま「意味上の」自動詞の「意味上の」主語をS(subject)とし、「意味上の」他動詞の主語をA(actor)、「意味上の」目的語をP(patient)というふうにいたしますと、これらの言語はSとPとが同じ形を持ち(絶対格)、A(活格もしくは能格)と対立しているということが出来ます。これに対しましてヨーロッパに見られる対格言語は、SとAとが同じ形を持ち(主格)、P(対格)と対立しているということができましょう。対格言語の場合SとAとが同じ格形を持ちますために、他動詞に標識を付けてPをSに変えること、即ち受動態が可能になります。PもSも行為者Aではなく、絶対格が示す対象は、自動詞の主語とも他動詞の目的語ともなることができるからであります。しかし能格言語あるいは活格言語の場合には、SまたはPをAに変えることが絶対にできません。Aが示す対象が他動詞の主語以外にはなれないからであります。このために受動態はあり得ないことになるのであります。

それではこの種の言語に態は存在しないかと申しますと、実はそうではありません。能動態と受動態の対立は、同一の現実の言語上の異なった表現であるという点に基づいてい

ると考えられます。いいかえますと、次郎が太郎を殺したのも、太郎が次郎に殺されたのも、現実には同じ事態をさしていると考えるのであります。態というカテゴリーはこのように、同一の現実を言語的に異なった構造で表すものと解されます。

一方インディアンの言語の研究者はこれらの言語に屢々versionといわれるものがあることを報告しております。これを相と訳しておきますと、求心相と遠心相の対立がこれでありまして。そして標識を持っているのは殆どの場合求心相だといわれております。例えば求心相と申しますものは「燃える」、「死ぬ」、「走る」、「歩く」のようなものでありまして、遠心相と申しますものは「焼く」、「殺す」、「追う」、「運ぶ」のようなものであります。これが態の一種であるのは、他動詞と自動詞の別の存在しない世界において、「焼く」も「燃える」も同一の事態と考えられるからに他なりません。このように致しますと、態というカテゴリーには、能動と受動の対立しか含まれないとする従来の考え方は、対格言語にのみ有効な考え方であって、決して普遍的なものでもなく、もっと広く考える必要があることが、判明して参ります。

このように主語・述語・目的語関係のありようが、言語のいろいろなレベルの構造を規定しているという認識に到達致しましたのが、最近の内容的類型学の意味するところでありまして、この構造によって、ある言語集団の認識そのものもまた規定されるということが分かって参りましたこと、また従来のヨーロッパの言語の現象を普遍的であると考えることが、偏見に過ぎないことが分かって参りましたこと、これが今後さまざまな分野に対して内容的類型学が持ちうる射程ではないかと考えられるのであります。

インド・ヨーロッパ諸語の属する対格言語とは全く異なるこの種の論理構造は、この種の言語の中に、貫徹されておりますことを示す、もう一つの例を挙げますと、例えば「太郎が次郎をたたいて逃げていった」という文章を見て、逃げていったのは誰か、と質問すれば、甚だしい愚問であると思われるのでありましょう。逃げていったのが太郎以外にはあり得ないと思われるからであります。しかし能格言語あるいは活格言語の場合には逃げていったのは次郎でなくてはならないのであります。それはどうしてかといいますと、こういうことになります。たたいた太郎は先ほどの分類で申しますとAであり、たたかれた次郎は当然Pになります。そして逃げていったものは意味上の自動詞と関わるわけでありまして、Sでなくてはなりません。ヨーロッパの言語は先にいいましたように、SとAとが同じ形をしていますから、逃げていったのは太郎でなくてはなりません、能格および活格言語の場合には、同じ形をしているのはSとPですから、S=P、即ち次郎でなくてはならないのであります。ですからこの種の言語では、もし太郎が逃げていったのなら、太郎を省略することはできなくなります。

このような事実は他動詞と自動詞の意味を営々と考えてきた私にとって、特に衝撃的でありました。しばらく類型学に没頭したのは決してこれを専門にしようとしたからではなくて、これによって自分の考えを変えていかなくてはならなくなったからであります。これらの経験から、知らず知らず入り込んでしまっている先入観を取り除き、虚心坦懐に対

象を見るということが、いかに難しいことであるかを、つくづくと思い知らされております。誠に日暮れて途遠しの感で一杯ではありますが、少しづつ努力を重ねる外にはないであろうというのもまた、実感でございます。御静聴ありがとうございました。